



ガティブな偏見だらけの考えばかりであった。しかし訪れてみてわかったことは、そんなものは一部のことであってそれだけですべてを判断するのは間違いであるということである。現地では、実際にいい思いをたくさんしてきた。まずは気候の良さである。雨季ということで雨は多かったものの、気温が高すぎず酷暑の日本から来たことを考えると過ごしやすい気候であった。人々との関わりについても、みんな人懐っこく我々に興味津々であった。どこへ行ってもスターが来訪しているのかと見間違えるほどの人だかりで、我々のことを出待ちしている方々もいたほどであった。食事に関しても、主食のインジェラはおいしかった。人それぞれ好みは違うかもしれないが「ワット」と呼ばれるおかずの味を引き立ててくれて、インジェラがエチオピア料理を楽しませてくれた。これらの経験が私を魅了していった。

## **(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から**

日本とエチオピアは、それぞれ別々の地域にあり、互いの距離も飛行機で丸一日かかるほど離れている中で、お互いのつながりや共通点多々見られた。私が最も感銘を受けている取り組みが、カイゼンの取り組みである。「無駄を省く」という考えのもと「整理、整頓、清掃、清潔、躰」の頭文字をとった5Sの実践に取り組んでいるが、大人に対してこの考え方が思うように浸透していないが、子どもに浸透させるために学校教育のカリキュラムに取り入れているようである。新しいものを取り入れず、伝統的な考え方を大切にするという意味では日本との共通点を感じた。また、街中にはトヨタ車が多く走っており、人々の中には「日本」を知らないが「トヨタ」は知っているという人もいるくらい生活に密着している。これだけでも繋がりを感じるが、カイゼンを取り入れていることで有名なのもトヨタである。カイゼンを通して、日本とエチオピアの強いつながりを感じた。

## **(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から**

エチオピアでの滞在で一番衝撃を受けたのが、水の利用についてである。ボンガという村に滞したとき、村全体が断水していた。ホテルでは、当然シャワーを使うことができなかった。トイレの水ですら流すことができない状態であった。その代わりに、断水した時のために貯めてあった水を使った。もしものときのためにエチオピアの人は水を大切にしているし、そのための備えもしっかりしているようなので大きな混乱にはなっていない。私自身、日本では水に困ったことがなかったので、このとき水の大切さを身をもって体験させられた。ここで、ふと立ち止まって考えてみると日本でもダムの貯水量が少なくなってくると節水呼びかけることがある。このときどれだけの人が本当に節水しているのだろうか。日本ではいくら安全な水に容易にアクセスすることがどこでも可能だとはいえ、水を無駄遣いするわけにはいかない。そう考えたとき、「水を大切にする」ということは両国の共通の課題ではないかと感じた。

## **3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」**

支援をしたあとも、自国の力で開発が可能になることを目標として支援をしているところが良いと感じている。研修中、中国の協力の仕方と日本の協力の仕方を比較してディスカッションをする機会が多かった。中国の良さは、ライトレールや高速道路をスピーディーに目に見える形で事業を進めるところ。日本の良さは、事業の後も自国民が自分たちの力で開発していく力を身につけるところにフォーカスしているところだという。例えばロールポンプ井戸を見学したが、井戸自体が自国内で集めることのできる材料で作られているので、機器が壊れてしまったときには安価で取り寄せることができ、さらには修理の方法がシンプルであるという形で作られている。このような支援の仕方であれば、いつまでもJICAの支援に頼ることなく発展できるということである。しかし、住民にとってはそれがもどかしく感じることもあるようで、それが解消される方法があればいいと思う。

#### 4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

##### ③ アディスアベバの青年海外協力隊とのワークショップ [近藤／鈴木]

最初に、それぞれが名前と役職に加えて教師海外研修の受講者は「エチオピアへの期待」を、青年海外協力隊には「エチオピアでうれしかったこと」を話し自己紹介した。その後、教師海外研修の受講者は4名ずつのグループに分かれて「エチオピアに来て驚いたことベスト5」を、青年海外協力隊の方々は4名と3名のグループに分かれて「エチオピアで困ったこととオススメベスト5」を話し合い全体共有した。主に出てきたもので教師海外研修の受講者からは「銃を持っている軍人が街中にいること」が出てきた。青年海外協力隊の方々からは「言葉の壁」「お腹を壊した」ということが困ったこととして出てきた。オススメベスト5は、後に食事をするときに役に立った。その後、受講者と青年海外協力隊の混合のグループに分かれて「日本の子どもに伝えたいこと」を話し合った。違うバックグラウンドを持つ者同士で違った側面から意見が出てきたが、主に「幸せとは何かを考えてほしい」「恵まれているということを知ってほしい」「物事を多面的に見てほしい」ということが出てきた。(鈴木翔大)

##### ⑤ 品質・生産性向上（カイゼン）普及能力開発プロジェクト（エチオピアカイゼン機構、カイゼン導入の製薬工場） [鈴木／油科]

Ethiopia KAIZEN Institute (EKI)にて、マッコネン副所長からお話を伺った。国が経済発展のために農業から工業へ産業をシフトしていきたいと考えたところ、アフリカ開発会議にてメレス前首相がカイゼンに興味を持ち日本政府に協力を要請、2009年から2010年にかけて行われたパイロットプロジェクトで一定の成果があったことから、カイゼンがエチオピアに受け入れられたとのことである。これを導入することで無駄を省き、作業効率を上げ、100億円もの成果を上げることができたようである。カイゼンでは「整理、整頓、清掃、清潔、躰」（5S）を導入しているが、専門家の田淵さんによると、整理と整頓をするだけで30%~50%ほどの効率が上がるとのこと。エチオピアでは学校のカリキュラムに取り入れることで人々にマインドセットを植え付けるようにしているようだが、実務経験が乏しいためになかなか取り入れることができないのが課題とのことである。これを解決するために、専門家がKAIZEN Promotion Teamを発足し指導しているとのこと。(鈴木翔大)

##### ⑩ ギンボ高校訪問+⑪ バルタ小学校訪問（子どもとの交流） [近藤／鈴木]

ギンボ高校では先生方からお話を伺い、バルタ小学校では子どもとの交流をした。ギンボ高校で教えていただいた課題は、学年が上がるにつれて在籍人数が減っていく傾向にあるということである。この要因として、この近辺に高校が他になく25kmから30km歩いて来る生徒もおり、登下校に時間が費やされ、勉強する機会が減り、落第していったり、暴行事件に巻き込まれたりしてしまうことにあるようである。また、教員不足や教材不足により一斉テストに出る内容を教えることができない、家族が学校に行くことを誇りに思えないなど解決すべき課題がたくさんある。なお、この学校には心理カウンセラーがおり生徒のテストへの不安、不登校生徒への対応などの相談を受けているようだ。バルタ小学校では、到着すると児童が歓迎の歌で出迎えてくれた。ここでは長縄や折り紙を使って子どもと交流した。子どもたちとは英語を使ってコミュニケーションをとることができた。(鈴木翔大)

##### ⑪ アディスアベバ市内見学（8/10 川見学、8/13 ホーリー・トリニティー大聖堂、8/15 国立博物館など） [鈴木／油科]

アディスアベバ市内見学では8月10日にカンベンナル川へ、8月13日にホーリー・トリニティー大聖堂、8月15日に国立博物館を訪れた。カンベンナル川では村を通りながら河原までおりたが、途中の道には動物

のフンがあり、河原にはゴミが多く置いてあった。

ホーリー・トリニティー大聖堂はヨーロッパにある大聖堂と同じように静かで厳かな雰囲気があった。壁にはステンドグラスでキリストの絵が描いてあり、神聖さが表れていた。礼拝に訪れる人も多く、周囲には讃美歌が流れていた。また、大聖堂の周りには露店のような形で讃美歌の収録された CD や礼拝に使われる線香、十字架の首飾り、聖書、エチオピア正教を題材にした子ども向きの本があった。

国立博物館には、アウストラロピテクスのルーシーが展示されている。今回はルーシーのある地下1階のみ見学した。展示してあったのはルーシーの化石であった。完全なる形として置いてあるわけではないが、人体という形の面影があるほど展示されていた。(鈴木翔大)

### ⑬ 南部諸民族州リフトバレー地域給水計画 [油科/鈴木]

JICA が利根エンジニアに委託している都市向け高架給水タンク建設現場を視察した。このタンクに貯めることのできる水の量は、街の産業発展、人口増加等の予測データに基づいて一日分の使用量を貯水できるように作っている。つまり、同じようなタンクを作っても場所によって貯水量が違うようである。この給水ポンプは電気を使って水が供給されるが、エチオピアでは停電が頻繁に起きるため停電したときに備えて発電機を置く。井戸水を汲み上げ、8か所の公共水洗台と水道メーターを買った家庭へ流す仕組みである。住民たちは公共水洗台へはジェリカンを持って給水しに来るので、水洗台はジェリカンを置くのに適した高さに設計しているようである。井戸水を探すために何か所か試掘し、水が出たところから着工していく。現在このタンクは工事中で、完成されると水汲みにかかる時間の軽減から時間的拘束が解消され、就学率の向上が期待されるようだ。(鈴木翔大)

### ● その他印象に残ったエピソード (病院)

本研修にて、最初の1週間ずっと咳が止まらず、ボンガからアディスアベバに戻った時に、病院にかかった。病院では、まず受付にて患者登録を行い、看護師に呼ばれて身長・体重・血圧を計測した。その後、一度受付に戻され、その次は医師の部屋へ行った。日本では看護師がついてきてくれるところが一般的だが、この病院では医師のオフィスに患者が出向く形式であった。症状を医師に伝えた後、血液検査とレントゲン検査を行った。血液検査は laboratory と呼ばれるオフィスで看護師が日本と同じような形式で採血を行い、レントゲン検査もレントゲン室にて日本で行ったことがあるようにセットされ呼吸の仕方も同じであった。そして、再度医師のもとへ向かい結果を聞いた。その後、会計を済ませ、院内にある薬局にて薬を受け取った。薬はクウェート製のものであった。なお、保険請求に必要な医師の診断書は無料で出してくれ、医師のサインはこちらから要求しないとしてもらえなかったが快くしてくださった。(鈴木翔大)

### 5. 来年度参加する先生へのアドバイス (持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

- ・トイレトペーパーを日本から持参したが、かなり役に立った。
- ・飛行機で隣の人、待っているときに目の前にいる人、みんな思った以上にウェルカムな姿勢で対応してくれる。積極的に話しかけ、他愛のない話でさえも大切な情報になりうる。
- ・事前にエチオピアのことや訪問先のことをしっかり勉強しておけばよかった。情報を持っていないがために、質問をすることができなかった。周りの人の質問のおかげで学びは深まったが、自分から深めにはいけなかった。
- ・それぞれの得意な部分を生かし、不得意を補いながらチームとして活動することができ、より多くの学びを共有することができた。
- ・チップは必要なかどうか、相場はどれくらいなのか、事前に調べたり JICA エチオピアの方に聞いておいて、徹底した方がいい。チップの情報を JICA エチオピアの中村さんに事前に教えていただいていたものの、

荷物を運んでくれたポーターさんにチップを要求され、かなり払ってしまったメンバーもいる。要求されても払わないという勇気も時には大切である。

- ・もしも食事が口に合わなかったらと思い、インスタントヌードルを持って行ったが、そもそもお湯を沸かす機械がないし、お湯を使うにしても水道水が汚いのでペットボトルの水を用意しなければならないので、あまり役に立たないかもしれない。

## 6. その他全般を通じての感想・意見など

個人や少数の受講者で現地の人と話すケースでは、自分一人や一部の受講者しか知りえない情報が生まれる。そんなときのために、感じたことを共有する時間やとっておき情報を共有する時間など、何かを「共有する時間」を頻繁に作ってくださったことによりチームで学んでいることの強みがあって非常に助かった。一方で、自分自身があまりチームに情報を提供することができなかつたと痛感しており、申し訳なさを感じている。この時間のおかげで、取りこぼした情報を取り戻すことを含めて学びの深まりを感じることができた。私自身が出来たチームへの還元の仕事としては、仲間と現地の人の中にあつた言語の壁を壊すことかと思ひ、必要なときには通訳をした。つまり、それぞれにできる事に自信を持ってやっていけたらいいのかなと感じた。このように、お互いに支えあいながら過ごした 12 日間はかけがえのないものになった。参加して本当によかったと思うし、ここでの学びで終わりにすることなく、生徒に還元するのは当たり前なこと、地域にも還元することができればと強く感じることもできた。

以上

